
殉愛者

唐務新斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殉愛者

【コード】

N9219Q

【作者名】

唐務新斗

【あらすじ】

何故、松永は親友が彼氏に贈ったチョコレートを盗んだのか。俺はそれが知りたかった。

雪の降る寒い日の放課後の出来事を俺は忘れない。

大島祐司が鞆の中を開けてひっかき回し挙げ匂に中身をぶちまけて、青い顔をしているのを尻目に、俺は教室を出た。行く先は廊下の端にあるトイレ前だ。白い息を吐きながら待っていると、女子トイレから帰り支度をした松永美由紀が出てきた。心なしか、顔色が悪いが構わず俺は声をかける。

「大島の奴が必死になって探していたぞ」

「……なんのこと？」

静まり返った廊下で、互いに白い息を吐きながら、しかし視線が交わることはなかった。

「お前の親友から貰った手作りチョコレートだよ」

松永は無言で首を振り、その場を去ろうとした。だが、化学の授業の移動の時に、松永が人目を盗んで大島の鞆から愛らしい包装紙に包まれた小箱を抜き取ったのを俺は確かに見たのだ。トイレから出てきたのは、恐らく証拠を隠滅していたからだろう。そう、チョコレートは松永の胃の中にあるはずだ。

いつもおとなしく引っ込み思案の松永が何故、そんな大胆な行動に出たのか、それを俺は知りたかった。だが、それを問いただす権利など俺には無いと言ふことに気づいてしまった。

これは、男一人と女二人の問題だ。第三者が興味本位で立ち入る隙などどこにもないのだ。

しかし、松永は心の重さに耐えきれなくなったのか、ぴたりと立ち止まりこちらを向いた。

「私はね、大島君が好きよ。彼女とつき合っている大島君が」

うつむいていて表情は見えない。震える声音は、何かを堪えているかのようだ。しかし、嘘をついているようには聞こえなかった。

純粹に誠実な、いかにも松永らしい言葉だった。

「それに、大島君とつき合って幸せにしてる彼女も好き」

そこまで言うと、松永はポケットから小さな瓶を取りだし、中から出した錠剤を口に含もうとした。

俺はとっさに彼女に飛びかかり、その華奢な手首を掴もうとしたが、遅かった。

「大島君は付き合いたしたばかりで知らないだろうけど、彼女はね」
無機質な音とともに瓶が転がる。白い喉から苦しげなうめき声が漏れた。

「破滅的に、悪魔的に料理が下手くそなのよ」

一筋の透明な滴が彼女の頬を流れ落ちた。足下に転がる瓶のラベルに書かれていた文字を俺ははつきりと覚えている。

『正露丸』の三文字を。

ある聖人が恋人達を祝福すると伝えられている日の出来事だった。

(後書き)

砂糖抜きチョコレートはただ苦いだけ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9219q/>

殉愛者

2011年10月8日05時49分発行